オリジナルの＿＿〜や言葉から
想像する＿＿〜, 動作の真似から
生まれる＿＿〜さえとりあえず
置いておける場所 Yuni Hong Charpe

オリジナルの〰〰や言葉から想像する〰〰、動作の真似から生まれる〰〰さえ、とりあえず置いておける場所。

まえがき

DISCUSSION I
「レクチャーパフォーマンスとは何か」
相馬千秋さんと

DISCUSSION II
「多言語主義空間における通訳」
田村かのこさんと

DISCUSSION III
「言葉と動作の相互作用を探る実践」
ハラサオリさんと

まえがき

この冊子は「レクチャーパフォーマンス制作とその翻訳に向けて：崔承喜＊（チェ・スンヒ）をめぐるダンスと言葉」というテーマで、2020年4月から2021年2月にかけ行ったリサーチをまとめたものだ。リサーチプロセスを読者と共有しつつ、議論のマテリアルとするのが目的である。

リサーチは、主に2つの観点から行なった。1つは、レクチャーパフォーマンスという形式から、もう1つは崔承喜について、すなわち内容からである。このように、2つの異なる方面からリサーチをしてきたが、この冊子では主に形式をめぐる考察と実践を取り上げる。

崔承喜について、冊子本文ではほとんど触れていない。なぜなら、彼女をどのように語ることが出来るのか、わたし自身いまだに考えあぐねているからだ。そこで語られるものに向けて自分の身体をどう置けば良いか、まだ分からない。最初は、形式を探ることで内容を語る方法へのヒントを得られるかもしれないと思っていた。そして、この冊子もその考えに基づき作っている。しかし、リサーチを進めながら実感したのは、内容を追うプロセスから形式が生まれる場合もあることだ。ここにひとつの例を紹介したい。

ウイルスによる様々な制限の影響で、日本で崔承喜に関するリサーチを行う予定が中止となり、わたしは頭を抱えていた。どうにか遠隔でリサーチを続けようと、オンラインで会える、崔承喜に詳しい人物を探すことにした。そんなとき、ビデオ通話でのインタビュー依頼を快く引き受けてくれたのが、在日コリアンの舞踊家、高定淳（コ・ヂョンスン）さんである。

途中インターネット接続が悪く音声のみに切り替えたものの、オンラインでの話は弾んだ。高さんは、平壌にあった崔承喜舞踊研究所で学んだ踊り手たちから、崔承喜の踊りを直接教わったそうだ。そのような踊りを引き継ぐ上で、彼女はある難しさを感じたという。在日コリアン3世である高さんは、日本語に囲まれて育ったせいか、在日1世や朝鮮半島の踊り手と比べるとどうしても表現できないニュアンスがあるらしい。また、高さんが朝鮮舞踊を指導するときには、日本語ではなく朝鮮語でしか表現できないと感じることが多いようだ。ある言語が醸し出すリズムから、独特な動作が生まれる、と高さんは言う。

高「これをどう訳して、どういう風に表現すればいいんだろう、というニュアンスの動作があります。ㅡㄱだったら、ㅡㄱっていうのを日本語でどう説明していいのかが分からない。横にいて一緒に踊りながら話したいですね」

んん…？　ㅡㄱとはいったい…？

ちなみに、わたしも元在日コリアン3世だが、伝統を引き継ぎたいという欲望は全くない。単純にㅡㄱとは?と不思議に思ったのだった。ㅡㄱに関する疑問を解消したく、インタビューの後しばらくして高さんへ次のメールを送った。

「ㅡㄱという動作がとても気になっています。多分、これからパフォーマンスを制作する際、キーワードになる気がしています。なので、メールだと限界があるとは思うのですが、もう少し、この動作について知りたいのです。前回、ㅡㄱとは呼吸や重心のこと、とおっしゃっていましたね。だとすると、ㅡㄱという動作は複数あるのかもしれませんが、それは例えば、重心を移動するときのリズムのようなものでしょうか？　例えば、足を曲げて、前にスッと進み出す時ような…？」

この質問に対し、高さんは丁寧に答えてくれた。彼女によると、まず、ㅡㄱとは動作ではない。動作を表現する際の、チャンダン（朝鮮半島古来の音楽に特有のリズム）の捉え方をいうそうだ。言葉で説明することが出来ないが、あえて言おうとするならば、上がったり下がったりするリズムのニュアンスを呼吸で表すような感じである、とのことだった。

…何となくわかったような?

ㅡㄱへの謎を残したまま、10月、私は東京朝鮮歌舞団のユン・ミユさんに、崔承喜の基本動作を踊ってほしいと頼んだ。撮影してくれたのは、映画監督の草野なつかさんである。私は直接現地へ行くことが出来なかったため、草野さんの目

を通じて〰〰の情報を得たいと思ったのだ。

届いた映像を見て、画面の中のミユさんの動作を真似してみたが、〰〰を理解したという確信は全く持てなかった。自分の身体で完璧な〰〰を再現できるとは到底思えないし、そこへ向かって頑張る気持ちも大してなかったせいかもしれない。あるリズムが言語と密接に結びつくならば、その言語との関係がない、あるいは薄い者にとって、〰〰を完璧に理解することは難しいのだろうし…。

ならば、私がミユさんの動作を真似ながら踊る〰〰や、高さんの説明から想像する〰〰とは、いったい何なのか。〰〰の偽物? でも、偽物の動作って、ある? 〰〰がある身体においてなされるとき、そこには既に新しい〰〰が生まれているのではないだろうか?

こうした疑問から、崔承喜に関するレクチャーパフォーマンスを、〰〰への考察から始めたいと考えた。〰〰のひとつの特徴は、それに当てはまる言葉が無いことだ。しかし、レクチャーは（基本的にはテキストの）朗読である。従って〰〰をレクチャーするためには、〰〰に該当する言葉が必要となる。以上の経緯をデザイナーの鈴木哲生さんに相談したところ、とりあえず〰〰を入れておける器のような、暫定的な言葉を置いてみるのはどう?ということになった。オリジナルの〰〰や言葉から想像する〰〰、動作の真似から生まれる〰〰さえ、とりあえず置いておける場所。そこからさらに範囲を拡大し、言葉に出来ないあらゆるリズムの一時的な置き場所として〰〰は考案された。

ここで冒頭の形式と内容の話に戻る。〰〰とは、ある内容を語るための形式であり、なおかつ、その内容自体から生まれたものなのだ。

ここからは、崔承喜に関してこれ以上言及することはない。レクチャーパフォーマンスという形式を借りてどのように崔承喜の踊りへアプローチするか、そして逆に、踊りからどのような形式が生まれるか。形式と内容との間を行き来することが、今後のわたし個人の課題となるだろう。

＊＊＊

本文の内容を説明する。

まずは相馬千秋さんと、レクチャーパフォーマンスの現状について書簡を送り合ったのち、インタビューを行った。やり取りは、過去の様々な作品を参照しつつお互いのレクチャーパフォーマンスへの認識のズレを確認することから始まった。そして、そのように認識された枠組みから、どのように拡張し新しいあり方を見つけていくかにまで及んでいる。

次に、ハラサオリさんとはまず手紙でやり取りをした。そして、2月1日から2週間、言葉と動作の相互作用を探るエクササイズを行った。自分の考案したエクササイズをスコア（指示書）にして、1日1通の頻度で相手に送る。受け取った側は、そのスコアを元にエクササイズを行い、そこから連想される新しいスコアを再び相手へ送る…という流れを繰り返した。

最後に、田村かのこさんとは、多言語主義の公的空間における通訳について意見を交換した。ここでいう多言語主義空間とは、複数の人が異なる言語を話す状況において、起こっていることをそれぞれの人が完全には理解できず、さらに言語以外の言葉も交わされる空間を想定している。

この冊子は、通常の書籍とは異なる形で流通される。まず、冊子の内容はウェブ上で閲覧できるし、ダウンロードも可能だ。そして、冊子自体は展覧会会場で展示される。また、レクチャーの様々なあり方を試すための装置として、展示期間中のワークショップでも使用される。ワークショップは吉田駿太朗さんと行う予定だ。この冊子が皆にとって、様々な「語る身体」を見つける、ひとつのきっかけになることを願う。

2021年2月

Yuni Hong Charpe

＊朝鮮半島出身の舞踊家（1911－1969）。朝鮮と日本をはじめ、ヨーロッパ各地やアメリカで公演を行った後、朝鮮民主主義人民共和国へ渡り崔承喜舞踊研究所を設立。その舞踊は、在日コリアンが踊る朝鮮舞踊のルーツとされる。

相馬千秋

アートプロデューサー／NPO法人芸術公社代表理事。

国際舞台芸術祭「フェスティバル/トーキョー」初代プログラム・ディレクター (2009-13年)、横浜の舞台芸術創造拠点「急な坂スタジオ」初代ディレクター（2006-10年）等を経て、2014年にNPO法人芸術公社を設立。国内外で舞台芸術、現代美術、社会関与型芸術を横断するプロデュースやキュレーションを多数行う。2015年フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受章。立教大学現代心理学部映像身体学科特任准教授（2016-21）。「あいちトリエンナーレ2019」パフォーミングアーツ部門キュレーター。2017年に東京都港区にて「シアターコモンズ」を創設、現在まで実行委員長兼ディレクターを努めている。

—

田村かのこ

アートトランスレーター。アート専門の翻訳・通訳者の活動団体「Art Translators Collective」を主宰し、表現者に寄り添う翻訳の提供と新たな価値創造を試みる。札幌国際芸術祭2020ではコミュニケーションデザインディレクターとして、展覧会と観客をつなぐメディエーションを実践。非常勤講師を務める東京藝術大学大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻では、アーティストのための英語とコミュニケーションの授業を担当している。NPO法人芸術公社所属。

—

ハラサオリ

1988年東京生まれ。ベルリン、東京、横浜を拠点に活動する振付家、パフォーマンスアーティスト。

幼少より踊り始め、現在は知覚、環境、オブジェクトをテーマに自らの身体をメディアとした作品制作を行っている。振付に伴い、ドローイング、テキスト、映像なども扱う。

東京芸術大学デザイン科修士、ベルリン芸術大学舞踊科ソロパフォーマンス専攻修了。2020年度アーツコミッション横浜U39アーティスト・フェロー。第9回エルスール財団新人賞コンテンポラリーダンス部門受賞。https://www.halasaori.com

Special Thanks

まず、依頼に快く応じてくださり、思考を共に深めてくださった、相馬千秋さん、田村かのこさん、ハラサオリさんに心からお礼の言葉を述べたいと思います。そして、__ʃ__の開発と冊子のデザインを担当してくださった鈴木哲生さん。「言葉にできないリズム」には__ʃ__を、リサーチには冊子という形を与えてくださったことに感謝いたします。また、パンデミックにより生じた変更にも柔軟に対応していただき、その都度感想や意見をくださった、舞台芸術研究センターの竹宮華美さん。冊子の形態と展示についてユニークなアドバイスをくださった、アーティストの青柳菜摘さん。まえがき文を細かく確認してくださった、舞踊家の高定淳さんやアーティスト・翻訳家の西田杏祐子さん。以上の方々にも大変お世話になりました。そのほか、ここへ記しきれない多くの方々に助けていただき、リサーチを進めることができました。どうもありがとうございました。

—

Yuni Hong Charpe

オリジナルの__ʃ__や言葉から想像する__ʃ__、動作の真似から生まれる__ʃ__さえ、とりあえず置いておける場所。

2021年3月28日　初版 50部発行

デザイン＝鈴木哲生　デザインアシスタント＝畔上陽一

協力＝RAM Association（東京藝術大学大学院映像研究科）

主催＝学校法人瓜生山学園 京都芸術大学

＜舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点＞2020年度「レクチャーパフォーマンス制作とその翻訳に向けて：崔承喜をめぐるダンスとことば」

研究代表　Yuni Hong Charpe

「舞台芸術の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」は、学校法人瓜生山学園京都芸術大学（旧名称 京都造形芸術大学）舞台芸術研究センターが母体となり、文部科学省「共同利用・共同研究拠点」の認定を受けて2013年度に設置された研究拠点です。

www.k-pac.org/kyoten

京都芸術大学 共同利用 共同研究 since 2013

© 2021 Yuni Hong Charpe